

---

# 空への道行き

土田かこつ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

空への道行き

### 【Zコード】

Z5610Z

### 【作者名】

土田かこつ

### 【あらすじ】

「一週間僕に付き合ってくれたら、痛みのない方法で君を殺してあげる」

古びたビルの屋上、少女の飛び降りを引き止めた謎の男は軽薄そうな顔でそう言った……。

偶然の邂逅が少女の過去に光をあてる。

売れない作家の計画。死にたがりの少女の打算。二人の思惑の行方はいかに。

## いつか見た空の色・1

その黒い小さな箱を開けた瞬間、彼が息をのむのがわかつた。

きらびやかな電飾に彩られた並木道。

傍らに並ぶベンチで、隣に座る彼の顔を見上げた。  
橙の柔らかな明かりが横顔を照らし出す。

手渡したばかりの小箱の中には、銀の十字架のネックレスがある  
はずだ。

クリスマスにかこつけた、彼への初めてのプレゼント。  
もちろんちゃんと男物で、デザインもそれほど派手じゃないもの  
を選んだつもりだった。

だが。

ふたに右手をそえた彼は箱の中身を見つめたまま動かない。  
怪訝と言つより不安になる。

もともとネックレス自体は自分の選択ではなく彼のリクエストだ  
ったのだが。  
好みに合わなかつたのだろうか。

「シルバーのクロス、欲しごとて言つてたでしょう?」

見かねて声をかけると、彼は大きくため息をついて顔を上げた。  
吐き出された呼気が白い。

「つけていい?」

「うちが頷くよりも先に、長めの鎖を頭からかぶるようにして首

にかけた。

深緑のセーターに銀色がよく映える。  
シンプルな形も線の細い彼にあつていた。

「なかなか様になつてゐるじやん」

ほつとして少し笑う。

彼はネックレスを確かめるように俯いた。

「ん、ありがと」

つと、彼の手が伸ばされた。

髪に「こみでもついてたか、とほんやりと見送つた腕は視界の横を  
通りすぎ、気づけば体を引き寄せられた。

「…」

呼吸が近い。

息がつまつて言葉が出ない。

体が熱を上げていく。

自分の心臓の音ばかりがうるさく、彼の鼓動を感じられない。

「…ちよつ、と」

みじろぎじよつとも抱きすぐめた腕はゆるがない。

油断した。

普段から態度や口づきこそ積極的大だが、彼が直接に触れてくることはなかつた。

せいぜい制服の上から捕まれるか髪の毛をかき回すくらいがいいところで、手をつないだこともない。歩くときは必ず人一人分間を

あけていた。

もどかしくも心安い距離感を、これまでずっと保つできたの。

「あおー」

声が少しだけぐぐもって耳に届く。

「なんか、ちょっと泣きたくなつ」

「馬鹿」

甘えをふくんだ声が少しだけ情けなくて笑った。  
よつやく体から力が抜けて、彼の肩にあごをのせる。

「うん。馬鹿だなあ」

ため息とともに吐き出された言葉が冷たく耳をくすぐつて逃げていった。

寒かった。

街中がむやみやたらにしゃべりあっていた。  
でもそれが苦にならないくらいには自分も浮かれていた。  
そんな季節。  
今は、昔の。

ぼんやりと白い、つす曇りの空を見上げて少女はため息をついた。

休み明けの月曜日、氣だるい空気がただよつ平日の昼下がり。おそらく、はたからすれば気まぐれに授業をサボった女子高生が暇をもてあましているように見えただろう。

彼女が腰掛けているのが、古びたビルの屋上の錆びた鉄柵でもなければ。

そこは駅前通りから離れた町のはずれにある、開発から取り残された古いビルだった。

もともと電子部品メーカーの自社ビルだった。会社は倒産したものの建物は放置され、そのまま用途のないオブジェのよみで町に居座り続けた。

もつとも、最近では肝試しの子どもたちやじゅれつく場所を探すカップルによつて新たな需要を得ていたようでもある。

少女は柵の外に投げ出した両足を揺らしながら空を見ていた。

その顔に思いつめたような表情はない。ただ何かをふっきったような目で空をながめていた。

(私が飛び降りたら)

ここは危ない場所として再び封鎖されるくなるのだろうか。子供たちから秘密の遊び場を奪つてしまつのはしのびないかな、なんて考えが頭をよぎつて苦笑した。

しかたない。

どうしようもない。

どうでもいい。

乾いたあきらめが感情を支配していく。

視線を下に落とす。

見慣れたローファーのはるか先、コンクリートの地面。

彼女の最後の目的地。

もう一度顔を上げ、由じ空を焼き付けてまぶたを閉じる。

そのまま何もない中空に身を躍らせようとかかとで鉄柵を蹴りつけ、

「一」

瞬間、身体に衝撃が走った。

予想していた浮遊感はない。

地面上に打ち付けられた？　まさか。

こんなに意識が残るはずがない。痛みもない。

第一、感じた力が前へではなくうしろへの。

困惑する少女の頭上で誰かがため息をつく気配がした。

「落ちたら痛いぞ？」

頭のすぐ上から聞こえたのは、的確なようひどく的はずれな言葉だった。

飛び降りようとした瞬間に少女を後ろから抱きよせて引き止めた男は、そのまま抱えあげて柵の内側におろしてしまった。

下から見えたからね、間に合ってよかつたよ。

どこか真剣味にかける口調であつさりと言わされて唇を噛む。

Hレベーターは動かない。下から階段で上ってくるにはそれなりに時間がかかるはずだ。

そんなに長い時間、空に見とれていたのか。  
あの古い非常階段を音もなく駆け上がるはずもないのに足音さえ気づかなかつた。

そんなに自分の意識に気をとられていたのか。

「なんでとめたの」

理由なんて聞いても意味はない。通りすがりのお人よしに決まつてゐる。

わかつていても言わずにはいられなかつた。

「んー。可愛い女の子がいなくなるのは世の中にとって結構な損失だろ?」

状況に似合わぬ軽口に、あらためて男を見る。

ダークグレーの長いコート。

中のセーター靴も、田深にかぶつたつばの広い帽子もすべて黒に近い灰色だ。

肌も浅黒い。夕闇の中にいたら保護色になつて見えなくなつてしまいそうだ。

顔は若く見えるが、どこか時代がずれたような格好だった。

「おとなしいね、君」

黙つたままの少女に男が笑いかける。

「この二つの止められた人って、正直もつと抵抗するものだと思つてた」

「別に。死ぬのなんていつでもできる」

少女は田をそらしてそっけなく言つた。

止められたことは腹立たしいが、こいつなつた以上ことを荒立てずにするませるべきだろう。

警察や家に連絡がいくようなことになれば一度田がやつにくくなれる。

幸い男はあまり生真面目なタイプではなさそうだ。

騒がなければきっとこの場を切り抜けられる。やつ算段をつけた。だが。

「じゃあ。一週間だけ僕に付き合つてくれないかな」

緊張感のない声が少女の期待を裏切つた。死にぞしないにどんなナンパだ。

呆れた少女が突き放すより先に、男が低くささやいた。

「一週間付き合つてくれたら、痛みのない方法で君を殺してあげる」

軽い口調はそのままの物騒な物言い。

だが、少女にはこの上なく魅力的な条件で。

しかめた顔を覗き込む男の表情は軽薄そうなくせにどこか底知れない。

「自殺の手助けは犯罪でしょう」

口についてでた言葉は自分でも言い訳めいていて。  
新手の詐欺にでも引っかかつたような気分で相手をにらんだ。

立ち話もなんだから、と連れてこられたのは路地裏の小さな喫茶店だった。

黒ずんだレンガ造りの店内は薄暗く、ノーヒートと煙草の匂いが漂う。

男は慣れた様子で店に入り、少女に席をすすめた。

注文をとりにきた店員が去るのを見送つて、しごれを切らしたよう

うに少女が口を開く。

「結局、あなたは何なの

「んー、通りすがりの吸血鬼、かな」

「」ともなげに返ってきた言葉はあまりにも突飛で、少女は眉をひそめて男を見る。

「……は？」

「信じしない？」

意味がわからない。「冗談にしても脈絡がなさすぎる。

少女の目は明らかに不審なものを見るようで。

露骨な反応に男は肩をすくめたであつたと言いかえた。

「月傘既望。じがない物書きさね

「ツキカサ、キボウ？」

少女は怪訝な声を出した。どこかで聞こ覚えのあるよいつな御前

だった。

しかし、既望と名乗る男の顔は記憶にはない。

「小説家？」

もつとも物書き、つまり作家なら名前だけを知っていてもおかしくはないかもしない。

考え直して軽く首を振る。

「君の名前は？」

「佐野葵」

しかたなく名乗った少女、葵はしかめた顔で既望を見た。まだ本来の用件を聞いていない。既望は頷く。

「それでさ。今書いてるのに死にたがりの女の子が出てくるんだけど、どうも筆が進まなくて。話を聞かせてもらえないかな、と」

間に合つてよかつたよ。

笑つて言つたあの言葉は「助かつてよかつた」ではなく「取材相手が捕まつてよかつた」という意味だったのか。

助けられたのが不満だったはずなのに、それはそれで妙に癪に触つて葵は眉間のしわを深くした。

「本当に殺してくれるの」

「ちゃんとつきあつてくれたならね」

「どうやって」

いりだちもそのままに言いつのめ。

結局、既望の口車にのる形でここまできてしまったが、望みどおり

り最後まで面倒をみてくれるかどうかは正直かなりあやしい。  
しかも痛みのない方法で、と既望は言った。

いつたいどうするつもりなのだろう。

何か薬でも使うつもりなのか。まさか本当に血を吸うわけでもないだろうに。

できるなら死んだ後であまり事件になるようなことは避けたかった。

既望は少し驚いた顔をして、ふっと息を吐くように笑った。

「それは秘密」

からかう口調は相変わらず。  
人を食つた笑顔もそのまま。  
だが、細めた目の中の奥にさつきまでとは違つ色を見た気がした。

(じの、顔)

見知らぬ男の顔のはず。  
なのにその表情は葵がよく知るものに似て。  
問いただすことも忘れて葵は息をのんだ。

からかうような笑顔の、その目の中一瞬浮かんだ違う色。  
何かを抑えるような、こらえるような、あきらめにも似た何か。  
見慣れぬはず既望の顔に呼びおこされたのは、葵が記憶から追い  
出すことのできなかつた少年の面影だった。

いつも調子のいい口ぶりと人懐っこい笑顔の少年が、不意打ちの  
ようにのぞかせた表情。気づくか気づかないかのほんの一瞬浮かん  
で消える。

既望の顔立ちは彫が深く肌も浅黒い。

記憶の中の少年は線が細くて色も白い。  
顔のつくりはまるで違う。

なのに、表情のつくりが同じなのだ。

見るものにかすかな痛みを抱かせる田の色。  
葵が、その意味を知りつつしてついにかなわなかつた……、

「お待たせしました」

ふいに、第三者の声が葵の思考をさえぎつた。

店員がコーヒーと紅茶とそれぞれの前に置いていく。

「コーヒー カップを引き寄せた既望の顔をうかがえれば、そこににはさ  
つき見た色はかけらもない。

(見間違い、か?)

馬鹿みたいだ。

仮に田の前の男が似た表情を見せたからといってそれが何だとい  
うのだ。

既望は手帳を開き、じやあ改めて、と口を開いた。

「それで、動機はなんだつたんだろう」

「さあね。空が綺麗だったから、とか」

既望は少し田を見張り、それからおかしそうに笑つた。

「なかなか詩的でいいけど、ちょっと読み手が納得しないかな」

葵の投げやりな調子を気にするふうもない。

さつき見せた一瞬の田の色以外、既望の表情はほとんど変わらな

かつた。

からかいつのような笑み。せいぜい軽く驚いてみせるくらいだ。  
どうしたら違う顔をあらわすだろうか  
同情でも引いてみようか。

「彼氏が死んだからとかなりいいの」「  
へえ、それは大きいな」

既望が少し身を乗り出した。

葵が引けたのは同情ではなく興味だけだったらしい。  
落胆というほどでもない落胆。苛立ちの形にならない苛立ち。  
かすかに波立つた感情を、大きく息を吐いて落ち着ける。

(まあ、いい)

ただの取材。

結局は他人事。

既望がその態度をつらぬくなら、こちらもただ情報を提供すれば  
いい。

どうせ切り捨てて置いていくだけの記憶だ。

最低限満足させて殺してもらえばいい。

過剰な同情よりよほどわずらわしくないだろう。

既望が感情をはさまないとこのなら、こちらも感傷は交えない。

「まあ、実際は彼氏でも何でもないけど  
付き合ってたわけではないのかい？」  
「死んだときには」

そう。彼が死んだとき、葵はただの他人だった。  
その少し前までは四六時中隣にいたとしても。

「彼も自殺？」

「交通事故。左折してきた車にひかれたの」

葵はもつとも、と付け加えて苦笑した。

「信号無視したのは車じゃなくてそいつのまつだつて言つから、実際事故だつたのかもわからないんだけど」「それはいつの話かな」

「前の春休みの終わり」

「三ヶ月前か」

既望は考え込むよつこ体を引いた。

「ただの後追い、といつ感じじでなさうだね」

妙にきつぱりとした物言いに葵は眉をひそめて身構えた。  
何をいつのだらう、この人は。

「彼が死んで、だけ縁はすでに切れていて、なおかつ事故からも  
だいぶ時間がたつてこる」

葵の顔をのぞきこむ。

「どうして今、死のうと思つたんだらつ？」

彼が死んだから、だけでは理由にならないと。

後追いなどというステレオタイプの説明では納得できないと。

共感も同情も哀れみも用いずに、事実を追つ口調で動機を探つて  
くる。

葵自身が気付きもしなかつた感情の裏側。

唐突に、低く鈍く柱時計が鳴つた。

針が三時を差している。

「じゃあ、これは宿題だな」

話を切り上げるように既望は言つた。

「のあと用事があるところ。拍子抜けした葵の顔をのぞきこむ。

「もつとじやべりたい?」

「まさか」

解放してくれるなら願つてもない、とあくまで突き放そうとする

葵に笑う。

「それは残念。じゃあ、悪いけどあとはよろしく

既望は薄い財布から千円札を抜き出してテーブルに置くと席を立つた。

去りざわ、顔だけをむけて付け加える。

「また明日も頼むよ」

これが見た空の色・2（前書き）

回想です。

## こいつが見た空の色・2

そもそものきっかけはなんてことはない。  
高校に入つてクラスで席が近かつただけだ。

「後藤、空です。よろしく」

振り向いて自己紹介をした前の席の男の子に葵は目を障った。

綺麗な顔をした子だな、と思った。

地毛だという茶色い髪に、同じく色の薄い目。肌も白い。  
整つた顔立ちで一見冷たそうだが、笑うと形の違う一重まぶたに  
愛嬌があつた。

綺麗な子だな、と思つた。

華奢に見えるから好みは割れるだろうが、かなりモテるタイプだ  
らう。

関わると面倒そうだな、と思つた。

ただ出席番号が近かつただけ。接点はない。  
席が変われば自然に離れていくだろう。  
とくに警戒はしなかった。

ところが。

「わーのさとつ」

やたらと明るい声に呼ばれてため息をつく。  
振り向けば調子のいい笑顔で空が歩いてくる。

「これから帰り?」

「委員会」

「ありや 残念」

そつけない返事に大げさな落胆の声が返ってきた。

そのまま歩き出した葵の横にちやつかりと並ぶ。

昇降口には遠回りだうとじと田で鱗をうかがえれば、まんまと田  
が合つてしまつた。

こここのところ万事こんな調子だ。

顔を見れば声をかけてくるし、ひとりと見ればやつてくる。

同じ図書委員になつた楠本敬司が空の友人だつたところのがまた  
まずかつた。

放課後、貸し出し当番のときには必ず顔をだしにくる。

二人にまきこまれる形で話し込み、図書の先生に注意されたこと  
もある。

それはそれで楽しくなかつたわけじゃないけれど。

正直、一緒にいると疑わしげな女子の視線を感じることが少なく  
なかつた。

ただでさえ人付き合いは得意じゃない。今はまだ不自由もしてい  
ないが、この先避けられるようなことがあれば学校生活に支障をき  
たす。

できればあまり目立ちたくない。

それに。

妙に積極的な様子はあるものの、どこまで本気なのかは疑わしい。  
普段からノリは軽いし照れも緊張もまったく感じられない。

葵にちよつかいを出しては反応を楽しんでいるだけじゃないのか。  
明るい笑顔でさえもときどき作り物めいてみえてどこか底知れな  
い。

下駄箱へ降りる階段を通りすぎた。

「ふうまでもつこむへるつむつだらう。

「あのや」

じびれを切り口を開いた。

「ふうけでんならやめてくれる?」「ううとひこから

きよとよとした顔でうひちを見る。

丸くなつた目には驚きのそれ動搖は見られない。

やつぱつ、と思ひ。

本氣ではなかつたのだろう。

「付合つぬもないくせに

つぶやへりて止き捨て、背を向けて歩き出す。

と。

突然何かに腕をとられて足を止めた。

空が制服の上から手首をつかんでいる。

「何、

にりみつけよつと顔を上げ、息をのんだ。

初めて見る表情だつた。

淡い色の目が夕陽に透けて妙に赤い。

いつもの笑みを含まない眼差しはいやに強く、まつすぐに葵をとりげる。

「付合つて、くれんの?」

いつになく硬い声。

捕まつた、と葵は唇を噛んだ。

通学電車に揺られながら、葵は窓の外に視線を向けた。見慣れた景色が見慣れた通りに流れしていく。

(もう、この電車にも乗るつもりはなかつたんだけどな)

ツキカサキボウと名乗る男との奇妙な出会いから一夜。朝、目を覚まして真っ先に感じたのは落胆だった。生きているという事実。

つまりは昨日、失敗したということ。

絶望なんて言葉を使うほど強い感情はなかつた。

(別に、死ぬなんていつでもできる)

既望に言つた言葉に嘘はない。

ただ、すぐに一度目を起こせないならば、それまで目立つ行動はさけなくてはならない。

これ以上引き止められるようなことは御免だ。

だから、仕方がない。

自分に言い聞かせてお、学校に行くのは乗り気がしなかつた。

死に損なつて改めて登校するといつのも馬鹿馬鹿しい。

……それに。

駅からそれで通学路の並木道にさしかかり、葵は息をつめた。  
校門が近づき生徒が増えるにつれそれは起ころ。  
葵がすれ違うと、ふと周囲の声がやむのだ。  
通りすぎ、しばらくして後ろから密やかなざわめきが耳に届く。

(ねえ、あの子ってや、)

(そうやつ、事故で死んだあの、)

(え、あのが?)

(えー、なんか地味ー)

(でもあれって、フラれてたんでしょう?)

事故の後、数限りなく繰り返されたやりとり。  
あいつが目立つ人間だったせいで、葵まで望まずして有名人だ。  
しかも、目撃者がないなかったために車にひかれたという以外詳しいことは何もわからず、様々な憶測が飛び交っていた。  
葵もまたそれらの声を否定する術を持たない。

何も知らないからだ。

教室のドアを開けるとまた一瞬、音が消える。

クラスメイトは今更噂をたてる事もないが、それでも微妙な距離をとっていた。

要はハレモノ扱いだ。背中に少し視線を感じる。

昨日無断で休んだから、それもまた好奇の種になっているのかもしれない。

誰も声はかけない。葵も無言で窓際の席につく。

結局、あのまま既望は去ってしまった。明日も頼むよ、と言つながら何の約束もない。

もちろん連絡先など教えていない。

(どうするつもりなのだのだろう)

もつとも、このまま会わずにすむのならその方が面倒がない。そう思いながらも葵は妙に気にかかつて、一日外を眺めていた。それとも既望のほうはあの喫茶店で待ち合わせのつもりでいるのだろうか。

授業が終わって帰りの準備をしていると、廊下からやたらと陽気な声が響いた。

「あーおーっ

」  
……杏香

無遠慮に高い声と呼ばれた名前に何人かが反応する。

うめくように葵はつぶやいた。  
幼馴染の今井杏香だ。6時限目は体育だったじくまだジャージを着ている。

クラスメイトの間をぬりぬりして葵の席までやってきた。  
教室に入つてくるならあんな大声で呼ばなくていいのに。

「何?」

身構えながら聞き返す。

葵は杏香が苦手だった。

人懐っこく、世話好きで顔も広い。おまけに勘も鋭い。

タイプが全く違うのに、何故か昔から葵のことをよくかまつた。あいつが死んで、一年生になつてクラスが分かれていいい加減離れていくかと思ったが、いまだにちよつかいをかけていく。確かに人見知りな葵はこれまで杏香に助けられたことも少なくない。

だが、だからこそ今の葵にとつては煙たい人物だった。

杏香は悪戯っぽく笑つて葵の耳元に口を寄せる。

「男の人気が正門で葵のこと待つてたよ」

「男？」

葵は怪訝そうに首をかしげた。

「つばが広くて黒っぽい帽子に長いコートの若い人。そーさな、2  
7、8くらいの」

(まさか)

顔が急に熱を持つ。それを見て杏香は見事に誤解した。

「やるじやん。あたしけつこー好みかも」

「そういうのじゃない」

「そお？ カオ赤いですよ、葵さん？」

興味津々、と言わんばかりの杏香の目。  
葵は鞄をつかんで席を立つた。

「……もつこい。じゃあね

無理やり話を打ち切って、杏香の横を足早にすり抜ける。  
「のまま話していくならどうまで詮索されるかわかったものではない。

「あ、ちょっと葵、ホームルームはー？」

呼び止めたときにはもう駆け出すよつに教室を出でていた。

「あーあーいいねえ、モテる人は」

男友達はともかく彼氏のいない杏香は半ば本気でため息をついた。

まだ生徒の姿のない鉄製の校門前に立つ人影に、葵はため息を吐いた。

のんきに手を振る男をにらみつける。果たして既望はそこにいた。

「……何でここがわかつたの」

昨日は学校には行つてないから後をつけられたわけではないだろう。

制服を着ていたのが失敗だつたか。  
紺ブレザーが多い学区のなかで、薄いグレーの制服はわかりやすかつたのかもしれない。

あきらめ氣味に葵はそう考えたが、既望からはずれた答えが返ってきた。

「昨日、君の靴についてた葉がケヤキだつたからね。ここいら辺でケヤキといつたら風見街道の並木道だろ？だからそこが通学路の学校はつてあたりをつけたのさ」

確かに風見街道は通学路だ。

だが昨日は家からまっすぐあのビルに向かった。並木道は通つていない。

(なんでこんな、くだらない嘘)

「あなた、変」

「物書きなんていじんなもんだよ」

慣れたことのようにあつと既望は言った。  
手に負えない、とばかりにため息をつく。

「どうでもここナビ、こんなところまで来ないでくれる」

既望は肩をすくめた。

「仕事だからなあ」「これも取材だつていうの」「そうだね、高校という場所を見てみたくて。なんか理由でもなきや来られないだらつ」

まぶしさにつき校舎を仰ぎ見る。

「おもしろい場所だな。独特の空氣がある。なんだか楽しそうだ」

外からするとそんな風に見えるものなのだろうか。

既望の視線を追うように降り返る。

ホームルームを終えた生徒たちの姿がひらめいて見え始めた。

既望が葵の肩を軽く押した。

「行こうか。昨日の店でいいかい？」

歩き出した葵が鞄をゆすって肩にかけた。  
ちぢり、と小さな金属音が鳴る。

「それ、君の？」

鞄の持ち手につけられた銀色の鎖に田をとめて既望は言った。

「その鞄の

持ち手につけるには鎖が長すぎるようで、何重にも巻きつけてあつた。

もとはネックレスだらうか。銀の十字架が吊り下げられている。シンプルな形だが、女の子がつけるにはやや大ぶりに見えた。

「傷だらけだね」

そう。何より田を引くのがその傷だった。

おそらく滑らかだつたであらう表面に強く擦つたよつた無数の傷が走つている。

端が黒ずんで汚れもあるよつだ。

「……形見」

「まつり、とつぶやくまつに葵は言つた。

「もとほこつちがあげたものだけぞ  
「事故の時もつけてたのか」

既望の指摘に葵は足を止めた。

「知らない」

田を伏せて言つた。

傷ついた銀の十字架。

春休みがあけた始業式の日、前の担任に呼び出されて渡された。空の保護者という人が葵にこれを渡すよう頼んだのだといふ。

(事故にあつたときにつけていたものだそりだよ)

担任が保護者から聞いたなら、おそらくそれは事実なのだろう。それでも葵にとつて事実といつ実感はない。ただの伝聞でしかなかつた。

葵に別れを告げ、突き放しておきながら何故ずっと手放さなかつたのか。

どうして事故の時にまで身につけていたのか。

保護者が葵に渡すように言つた訳は。

それは、空の意思だつたのか。

何も知らない。何も見ていない。何もわからない。

答えが出ない問いを追い続けるのは消耗する。  
だからもう終わらせようと決めたのに。  
終わらせる過程でまた思い起こされる。  
なんて、不毛。

「佐野さんは、彼のこと好きだった?」

葵の鬱屈などお構いなしに既望は質問を続けてくる。遠慮も何もないはしない。

それでもむきになつて反発するのは予供じみてる気がして、葵はつま先に視線を落とした。

「嫌われてたけどね」

遠まわしに認めたことでもたからかわれるかと身構えたが、既望は予想に反して顔をしかめた。

「嫌われてた？　どうして？」

単純な驚きではない口ぶりは少し意外だった。

動機として「彼氏が死んだから」と言った時よりも反応が大きい。事故の前には別れていたのだから別に不思議はないだろうに。作家先生は純愛モノがお好きか。

「さあ。別れてからずっと避けられてたから。メールも電話も無視だった」

「……事故は春休みだったね。別れたのはいつ？」

「一月の終わり」

既望は返事のかわりにため息をついた。

どうやら昨日引こうとして失敗した同情を今更のよう引き出しきてしまつたようで。

なんとなくおかしくなつて葵は小さく笑つた。

## これが見た空の色・3（前書き）

回想です。平和だった日常の風景。

## 二つが見た空の色・3

昼休み、自分の席で弁当を取り出した葵に杏香が声をかけた。

「あれ、後藤は？」

「知らない」

「なーに、せっかく付き合つてゐんだからお皿くらう一緒に食べた  
らしいのに」

何故か杏香は唇をとがらせる。

「別に向こうが言わないならいい」

「んなもつたいたい」

何がだ、と葵が返すより先に、杏香は後ろを向いて声をかけた。

「ねえ楠本、あんた後藤がどこいるか知らない？」

「あー、図書室か保健室じゃないか」

言いかけて敬司は窓の外の曇り空を見上げた。

「この天気ならこの屋上かもしけないけど

「だつてよ？」

だつてよと言われてもと思つたが、ここにいても杏香につつかれるだけかもしれない。

葵は仕方なく弁当をもつて立ち上がった。

一番手近な屋上へ向かう。

屋上と言えば休み時間には人気のスポットだが、葵のクラスがあるB棟の上にはめつたに人が来ない。給水タンクがあるせいで狭く、隣の棟の影になつて日当たりが悪いからだ。

半信半疑で薄暗い階段をのぼる。

まあいらないならいいで適当に時間をつぶせばいい。

投げやりに考えながら、葵は鉄の扉を押した。

扉の向こうで誰かが寝そべっているのが見えた。金属がきしむ音に気づいて体を起こす。

空だった。

「……その、さん？」

空は田を見開いて葵を見た。

純粹な驚きの表情に不意を突かれる。

ふだんの空の顔は笑うにしろ驚くにしろ、どこか意識して作つているもののように見えた。

意識をとりはらつたその田は妙に無防備で、葵は息を呑んだ。

「よくわかつたね」

髪の毛を直しながら笑う。

もういつも空の笑みだ。

なんとなく寂しいような一方でほつとして、改めて空を見る。

「もひ食べたの」

昼休みがまだいぐらもたつていの人に食べ物を持つている様子がない。

自分も食べてからくればよかつたかな、と思いながら窓の隣に腰を下ろした

「俺はいつもここに。」

「最近は。天気によつては中の階段とか」

「そつか

葵はつぶやくように付け加えた。

「明日も、来ていいかな」

「え？」

葵の言葉に空は珍しく迷うような顔になつた。  
失敗、したか。

葵は空から目をそらした。

「嫌ならいいけど

「あ、じゃなくて」

返つってきたのは思いのほか強い声だった。

何か決心したように深呼吸し、あのせ、と空は切り出した。

「俺、ご飯の後つて速攻でトイレ行かなきやないんだよ。絶対お腹『口口口』

決まり悪そうに頭をかく。

「えーと。だからなんというか、それでもよければ？」

「……もしかして、それでいつも一人で食べたの？」

「うん、まあ」

本当は気になっていた。

休み時間はクラスメイトにかこまれている空が、昼休みになると  
いつの間にか姿を消すのだ。

葵にも声もかけずにはいなくなる。

何かあるのかと思っていたのに、嘘をあけてみれば何であっけない理由だろう。

我慢できずに葵は吹き出した。

気まずそうな空と、妙な心配をしていた自分がおかしかった。

「ひどいな。病弱美人も樂じやないんだぞ？」

「自分で言つたな、美人とか」

すねたように唇をとがらせて、空はまたあお向けて寝転んだ。  
その動きを追うように葵は空の顔を眺める。

白いな、と思った。

もちろん頭上に広がる薄雲りの空の白さに比べたら、当たり前の

ように色のある肌をしている。

青白いというわけでもない。

ただどうしじょつもなく血の気が薄いのだ。

「病氣つてさ、治らないの」

「んー、なんかもう病氣つていつか体質だからね」

葵の問いかけに、返ってきたのはあまり興味のなさそうな答えだ  
つた。

もうあきらめているのだろうか。病氣が自分自身になるくらいに  
受け入れて。

「そつか」

吐き出した言葉は自分でも思った以上に沈んで聞こえた。  
空も気づいたのだろう。返ってきたのは軽い調子の声だった。

「まあでも別に死ぬようなものじゃないし。ちょっと不便なだけ」「そつか」

今度はもう少し明るい声を出せただろうか。  
薄暗いのに奇妙にまぶしい白い空を見上げて、葵は目を細めた。

## 追憶の水曜日

黒ずんだレンガの壁にはさまれた重い扉を押しながら、葵はためいきをついた。

昨日の学校での待ち伏せに耐えかねた葵は「明日も迎えに行くよ？」という既望の言葉を全力で拒否した。

からかいまじりの押し問答の末、結局件の喫茶店で待ち合わせることに落ち着いたのだ。

一応は自分の要求が通ったはずなのに何故だか丸め込まれているような気がぬぐえない。

先についていた既望は、葵が席に着くなり尋ねる。

「どんな人だつたんかい、佐野さんの彼つて」

憮然とした顔の葵を気にすることもない。

……どんな。

記憶の中の少年の面影を探る。

ただ空の特徴をあげるだけなら何も難しくはない。だつてあいつは。

「目立つ奴だつた

葵が迷惑がるくらいに。よくも悪くも尊になつた。

「綺麗な顔をしてた。色が白くて。髪も目も茶色くて日本人離れし

てた

整つた顔立ちと人懐っこい笑顔で一部の女子には熱狂的な人気があつた。

「体が弱かった。色素欠乏ってわけじゃないけど日光に弱いみたいだった。線がほそくて、貧血で倒れたりして」

休みも多く、外の体育はほとんどサボりで一部の男子からは反感を買っていた。

「でも性格は団太かつた。調子がよくていつもへらへら笑つてた。人を煙に巻くのがうまかつた。腹が立つくらい」

からかう奴らを逆手に取つて笑いのネタにしたりして。聞いている葵がひやりとすることも少なくなかつた。  
たぶん、敵も味方もどちらも多かつたんだろう。  
それだけ人の目も氣も強く引く奴だった。

既望はただ黙つて聞いている。

相手の反応がないまま言葉を連ねていくと、だんだん独り言めいてきて葵は口をつぐんだ。

空の特徴をあげるだけなら簡単だ。

きれいで病弱でお調子者。

それは確かにあいつを説明する言葉に違いない。  
だけど。

きれいで病弱でお調子者。

たぶんそういう人は他にいくらでもいるんだろう。  
だからそれは空そのものを表す言葉にはならない。

違う。そうじゃない。それだけじゃない。  
うまく説明できない。

そもそも葵は説明できるほど空のことを持つていても言えるのか。  
その本心がわからなくて自分をも投げやむつとしているのに？

「……彼は果報者だな」

静かなつぶやきに葵は顔を上げた。

からかうなら絶好の機会だろうに、いつもの人を食った笑みはそこにはない。

妙にやわらかい眼差しに葵は苛立つた。

「嫌いなやつに色々言われて何が果報なの」

簡単に言つた。まるで安い慰めみたいな。

「ああ、そういうことになつてたんだつたか」

「そういうことって」

「嫌いだって、本人に言われたのかい？」

葵は虚を突かれて既望を見た。

「わかつてているのは、さけられたつてことだけだろう。どうしてさけたのかはわからない。確かに嫌われたとするのが順当な考え方だけ、実際のところは不明だ。彼が死んでそれを確かめる術がない」

だから、確かめられないからその順当な考えを飲み込もうとしているんじゃないか。

葵の反論を制して既望は続ける。

「彼は死んで、とりあえず君は生きてる。事実はわからないなら、自分の望むように考へてもいいんじゃないかな」

真顔で葵の田を見る。

「佐野さんは、彼に嫌われていたんだと思いたい？」

思いたいのかと聞かれれば、思つより他がないから。  
なのに、既望の言葉は葵の思考にたやすく風穴をあける。  
どう考えようともどう解釈しようとも自由だと?  
だがそれは、あまりにも。

「都合が、よすぎる」

「駄目?」

笑い含みに聞かれても葵には答えようがない。

「小説なんか、全部都合のいいもじも組み合わせだよ」

既望は当たり前のように確証のないもじもを肯定する。  
事実でなければ信じられない。  
本當かどうか確かめられないと納得できない。

だけど、真相など望むべくもないのに欲しがるのは葵のわがまま  
だというのだろうか。

それぐらいなら都合のこりょうに解釈して自分自身をなだめすか  
すべきだと?

「まあだけど、佐野さんがそういう風に片付けられないってこいつ」とこそが彼にとって果報なんだらうな

考えに沈んだ葵を既望せびいかひいやむつて聚めて置つた。

## これが見た空の色・4（前書き）

回想です。小さな幸せの光景。

## こつが見た空の色・4

「あのや、 杏香」

珍しく自分がから声をかけてきた葵を、杏香は困惑がるように見た。

「男物のアクセサリーとか置いてる店って知ってる?」

「どしたの、また敷から棒に」

「空が、欲しがるから」

ためらいがちに答えると、杏香がおののいたように体を引いた。葵が自分の失言に気づいた時にはもう遅い。  
そのまま振り向いて後ろの席の敬司に話をふる。

「ちょっと奥さん聞きました? 」この子まさかの名前呼びですよー。  
「あー、はいはい」

葵の言葉にか杏香のノリにか敬司は呆れた顔であしらつた。

「いいねえいいねえ春ですねえ」

「今、真冬だけど」

「ひつわー」

敬司のツッパリは速攻で切り捨てて、杏香は葵に向を直った。

「で、どんなのこすんの」

「シルバーのクロスがいって

「んー、ネックレスか何か？」

ふと気づいたように杏香は首をかしげた。

「でも、あいつアクセとかすんだね。ちょっと意外」「普段はあまりつけないみたいだけど」

クラスでもピアスをあけたりしている男子は少なくはない。だが、空がこれまでアクセサリーを身につけているのは見たことがなかった。

葵も不思議に思つて聞いてみると、空はおどけたように笑つて言った。

（なんかさ、葵がくれた十字架なら願い事のひとつくらい叶いそうじゃない？）

杏香は大げさにため息をついた。

「あーあ、まったく色気づいちゃつてもう。いつそペアリングでもしたらいいのに」「それは私が嫌」「うわひつど」

葵の即答に笑いながらも、杏香はこくつかの店の名前をあげた。

## 迷惑な木曜日・1

葵に聞き取りをはじめて四日目。

既望はこの日葵の友人という少女を呼び出した。

先日学校に行つたときに声をかけてきた、いかにも好奇心の強そ  
うな大きな目をした子だ。

今井、杏香といったか。

葵とはまるで性格が違つ。 対照的ともいえる一人がどんな接点を  
持つのか興味があつた。

杏香は待ち合わせの喫茶店で既望を見つけると大きく手を振つた。  
既望は少し驚いたように杏香を見、笑つて手招きする。

「悪かつたね。呼び出したりして」

「うん」「や、いつも聞きたいことあつたし」

言いながら椅子を引いた杏香に首をかしげた。

「聞きたい」と?」

「わ。きぼーさんて葵と付き合つてるんですかーって  
「まさか」

既望は目を丸くした。

言下に否定して肩をすくめる。

「少なくとも佐野さんは認めないだろ? 何でそう思つたんだい  
?」

「楽しいじゃん、ネタ的に」

あつさつと杏香は言った。

困ったような顔の既望に付け加える。

「あとまあ、前に彼氏ができたときと葵の反応が似てたから」

「といつと」

「何を言つても顔が赤い」

杏香はにやりと笑つて言つ切つた。

「それはまたわかりやすい」

「だからきぼーさんにはまだ望みあるよ。がんばだ」

何故かけしかけようとする杏香に苦笑する。

「無理だろ？ 彼のことを見られないつひは」

杏香の顔から笑みが消えた。

「やつぱ、まだ駄目かあ」

「それで、その彼のことなんだが」

既望が切り出すと、突然杏香が声を張り上げた。

「ストップ！ キぼーさんて仕事なにやつてるの？ マスク//系列？」

「いや、ただの売れぬい物書きだよ」

「小説家？」

「そう。今書いているのが行き詰りやけってね。少し話を聞かせてもらいたいんだ」

「んじゃ、直接葵の」と田したりはしないね？」

「それはもちろん」

「なりビーナ」

「ひえきれない、とこつよつに既望は笑い出した。

「いい子だな、君は」

杏香はきょとんと既望を見、それから顔をしかめた。

「嬉しくない」

「可愛いよ」

「やつぱり嬉しくない」

既望の顔をじと田でこらんで、杏香は大げさにため息をついた。

「まあいんだけど。で、何だっけ」

つながされて既望は手帳を開いた。

「そうだな、佐野さんが彼にあげたネックレスのことは知ってる?」「ああ、うん。一緒に買いに行つたから。クリスマスのつしょ?」

既望は軽く田を見開いた。

「一緒に?」

「そ。付き合つてたころはまだ素直だったのよ」

「銀の十字架というのは佐野さんが選んだのかい?」

「や、もともと彼氏のリクエストみたいよ」

「どうか、と考え込むように口をつぐんだ既望は、視線を感じて我に返った。

杏香が大きな目でじっと見ている。

取材相手に観察されてたら世話がないな、と既望は苦笑した。

「どうして別れたかは知ってる?」

「んー、それがわかんないんだよな。三学期入つたらもうぎくしゃくしてたから」

杏香は大きさにため息をついた。

「クリスマスまでは一人してもつそい甘々だったのにさー」

「佐野さんは、嫌われたと思つているようだけど」

杏香は驚いたように既望を見てから渋い顔になつた。

「あー……。まあ別れてからさけられてたのは確かになんだけど。あれはちょっと。んー、どうなんだうな」

「理由がありそう?」

「彼、後藤つていうんだけどさ、あいつもともと体が弱かったのね。日光に弱いとかで外体育はほとんどなかつたし」

頼んだオレンジジュースで唇を濡らす。

「んで、ちょうど氣まずくなりだしたころからさらに倒れたりとか休んだりが増えて。だからなんか冷めたつていうより、病氣が悪化してすれ違つたとかじゃないのかな」

「死因は交通事故だそうだけど」

「うん。ただ夜の事故で見てた人とかもいなくて。だから一時期いろんな噂がたつた」

「といつと」

「いわく、事故じゃなくて自分で飛び込んだんだとか、誰かに突き飛ばされたとか。突き飛ばされたネタは結構根が深かつたな。後藤がモテんの妬んだ男子か、ストーカーまがいのファンの女子かってね。でも、中でも一番有力だつたのが」

上田遣いに既望の顔をのぞきこみ、声を低めて言った。

「フラれた葵が逆恨みしてやつたんじやないか」

「それは、」

一の句が告げない既望に、杏香は素に戻る。

「あの子もちやんと否定しないからやー。たぶん嫌がらせとか相当あつたんじやないかな」

「今井さんは、その話は信じていないのかい？」

「え、や、むよっと待つてそりやないよきぼーちゃん」

杏香はあわてたように言った。

「まあね、葵はまだ好きそうだったし思いつめてなかつたとはいわないけどさ。でもそんなんできるわけないんだよ。あの子の場合、そういう矛先は相手じゃないくて自分に向ぐの」

「確かに、佐野さんはそういうことをしそうには見えないかな」「だからさ、むしろ危ないのは葵自身なのよ。ぶっちゃけ今でもやばいって時あるし。しづかーに自暴自棄になつてるつていうか」「見ていてわかる?」

まあねえ、と杏香は苦笑した。  
少なくとも、と既望は思ひ。

少なくとも葵には、彼女の危つさに気づいてくれる人がいるのだ。  
たとえ葵が望まなくとも。

「でも、あたしじゃ重石になんないからなー。もう完全に煙たがつ  
てるの見え見え。嫌なんなる」

杏香はぼやく呟ついた。

「だもんで個人的にはきぼーさんに頑張ってほしいわけ」

既望をけしかけていたのはやつこいつらじい。  
その目的には共感しなくもないが。

「なかなか難しいな」

「んなことないと思うんだけどね」

いたずらっぽく笑つて既望の顔をのぞきこむ。

「これから葵にも会うの」

「ああ、ここの後約束して……、来たね」

既望の言葉に店のドアを振り向く。

そこにはこれ以上ないほど顔をしかめた葵が立ちつくしていた。

「ついわ、見事なタイミング」

愚痴るよつにつづぶやいて杏香は席を立つた。

葵は既望をにらみつけたまま田も合わせてこない。

杏香は肩をすくめて、すれ違いながらの耳にわざやいた。

「いのちと命が繋がる地張りの、必ずこころ

まだ体温の残る椅子に腰掛けるなり葵は言った。

「なんで杏香を呼んだの」

既望はわざとひしょく脣根を寄せた。

「そう怖い顔をしない。可憐いのにむりたいない」

「関係ない。理由は何」

「それこそ関係ないんじやないかな。あと三日の命だらうへ。」

「もういい。杏香に聞く」

葵は言葉に詰まつたよつて面を噛んだ。  
すねたような反応に既望は口を細めた。

「君は今井さんをひがめて」

葵は顔を上げた。

「今井さんには君のこと聞いたから、君には今井さんのことを聞

こつかと思って。公平だらうへ。」

「あなただけが不公平だわ」

「それじゃあ、今井さんと話していくわかったことをひがむ」

既居がかつた仕草で葵の口をのぞき込む。

「彼女は君を心配してこる」  
「知ってる」

苦々しげに葵は言った。

「だからいつといつ」  
「どうして？」

葵は怪訝そうに既望を見上げた。

「ここで聞き返されると思わなかつたのだろう。」

「気にしなければいい。頼はもつ死ぬんだらいつ。」

「杏香がかかわると面倒くさい。……いろいろ」

「未遂の」とも今回的话も今井さんにはしていないよ？」

既望の言葉は安心すべきものなの、口調はどこか挑発じみて聞  
こえて、葵はその顔をにらんだ。

黙つたままの葵に既望はあつたり話題を変えた。

「じゃあもし、今井さんが君の立場なら死ぬと思つへ。  
「知らない」

そつけなく葵は言った。  
だが今度は押し黙つても既望は話を変えようとほしなかつた。  
葵はため息をついた。

杏香なら。解せない疑問を残したまま、空が死んだとして。  
悲しむ、ことは悲しむだらつ。葵よりずっと率直に。  
たぶんまつとうに悲しんで、まつとうに現実と向き合つ。  
空が死んだことも。疑問が解けないことも。自分が置かれた状況

をそつくりそのまま飲み込んで。

あの性格なら一人になつたつて孤立もしない。

そもそも、付き合っていたのが杏香なら。

別れるようなことにはならないかもしねり。

「杏香なら死はない。死ぬような状況にならない」

投げやりに、だが妙にきつぱつと葵は言つた。  
既望は田を見張る。

「何？」

問いただす葵に、既望はおかしそうに笑つた。

「やっぱり今井さんはす”いな。尊敬してしまつよ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5610z/>

---

空への道行き

2012年1月8日20時45分発行